

エスノメソドロジカルな社会学的研究とは何か

松山大学

山田富秋

1.目的

ガーフィンケルの *Studies in Ethnomethodology*(1967)から半世紀が経ち、サックスの *Lectures on Conversation, Vol. I&II*(1992)から 25 年、そして日本でのアンソロジーの出版 (『エスノメソドロジ：社会学的思考の解体』1987) から 30 年が経過した本年において、社会学においてエスノメソドロジが担うべき役割について考察する。

2.方法

山田 (2011) が提起した問題が、メンバーシップ概念の再検討とフランシスとヘスター (Francis & Hester, 2004=2014) が明示化した「自己省察」と「浸されることを通じての習得 (immersion)」という方法、さらにはハッキングのループ効果概念を取り入れた酒井泰斗ら (2009, 2016) の「概念分析」によって、どのように解決されるのかを示す。

3.結果

山田 (2011) は、Garfinkel(2002)と Rawls(in Garfinkel, 2000, pp.6-7)に依拠して、日常会話などの世俗的コンピタンスに対比して、ガーフィンケルが「方法の固有性要請(unique adequacy requirement)」の強い使い方とした、法律、自然科学の実験、プロの音楽演奏等々のコンピタンスの場合には、自己の身体を通してローカルな状況に「入り込み」、それによって、当該状況の協働的な組み立て方法 (つまり、メンバーのコンピタンス) を何らかの仕方で獲得し、今度は獲得された方法をリフレクシヴに振り返って記述する必要があると指摘した。この指摘は、Francis & Hester (2004=2014) によって「自己省察」と「浸されることを通じての習得」として、ほぼ同じ意味で具体的に展開されていた。

また、山田 (2011) の薬害エイズ事件の社会学的調査は、ハッキングのループ効果とマトリックスという概念を通して、ひとつの概念分析として再構成することができることがわかった。すなわち、2001 年に発足した研究チームに見えていた構図とは、安部英の裁判が係争中であった当時の薬害エイズ事件報道のマトリックスを背景として生まれた善悪二元論的構図であり、それは実際にこの事件に関与した医師や患者が見た構図とは異なっていた。ちょうど Goodwin(1994)の指摘とは逆の方向で、調査チームは 1980 年代の血友病治療と HIV/エイズ研究の医学的知見を「浸されることを通じて」習得することによって、1980 年代に通底したオルタナティブな構図を生み出すマトリックスを描き出すことができるようになった。

4.結論

フランシスとヘスターの指摘を概念分析と組み合わせて考えれば、ある歴史的・社会的文脈における社会現象を研究する時、メンバーの指向とレリヴァンスに立脚し、メンバーの指向と理解がもたらす帰結に注意すると同時に、メンバーの指向を示すデータが相互に点検できるという条件を満たせば、エスノメソドロジカルな社会学は可能である。

文献

- Francis, D. & S. Hester, 2004, *An Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction*, Sage Publications=2014, 中河伸俊・岡田光弘・是永論・小宮友根訳『エスノメソドロジへの招待』ナカニシヤ出版
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編, 2009『概念分析の社会学』ナカニシヤ出版
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根編, 2016『概念分析の社会学 2』ナカニシヤ出版
- 山田富秋, 2011, 『フィールドワークのアポリア』せりか書房